

Social and Emotional Learning (SEL)において重要となる3要素に関する考察

A study about three factors which should be important for SEL

山川 修^{*1}Osamu YAMAKAWA^{*1}^{*1}福井県立大学学術教養センター^{*1}Center for Arts and Sciences, Fukui Prefectural University

Email: yamakawa@fpu.ac.jp

あらまし：Social and Emotional Learning (SEL) においては、育成を図る能力として、自己への気づき、他者への気づき、自己のコントロール、対人関係、責任ある意思決定、の5つが挙げられている。これら5つの能力の向上のためには、昨年のJSiSEで筆者が発表した自律的学習者の3要素(内省、信頼、意味)が重要になるのではないかと考えている。これを実証するため、内省と信頼に焦点をあてたPBLの中で、SELの5つの能力と大まかなところで重なる、情動知能の指標が向上した事例を紹介する。

キーワード：SEL, セキュアベース, 情動知能

1. はじめに

2018年度のJSiSEの全国大会において、ダイアログは、自律的学習者の3要素である「内省」、「信頼」、「意味」を創り出す機能があるというモデルを提案した⁽¹⁾。また、2019年度のJSiSEの全国大会では、その3つの機能のもとに「安心(セキュアベース)」という共通項があり、内省という機能に関しては、内受容感覚と関係が深いのではないかとという仮説を提案した⁽²⁾。今年度は、この3つの要素が、Social and Emotional Learning (SEL) の5つの力である、自己への気づき、他者への気づき、自己のコントロール、対人関係、責任ある意思決定、に関係するのではないかとという仮説を提案し、これを実証するために、この3つの要素のうち、内省と信頼に焦点をあてたPBLの中で、SELの5つの力と重なるところが多い、情動知能の指標が向上した事例を紹介する。

2. セキュアベースと3機能

Bowlby が提唱しているアタッチメント理論⁽³⁾によると人に対する信頼感からセキュアベースが形成

されるとされた。それを拡張して、人生の目的や意味、瞑想や内省によってもセキュアベースが形成されうると考えると、ダイアログが創り出す「内省」、「信頼」、「意味」の3機能は、最終的には個人の中にセキュアベースを創ると考えることができるという仮説を昨年度提案した⁽²⁾(図1)。社会のネットワークの中での信頼関係がセキュアベースを形成するのはアタッチメント理論が教える通りだが、セキュアベースが存在することにより信頼関係が築きやすくなることもまた自然である。これと同様に、内省や意味に関しても、セキュアベースの原因であり結果でもあると考えることができる。この点を図1中では、双方向の矢印として表現している。内省に関しては、従来は、メンタルモデル(心のネットワーク)のみを対象として想定していた。しかし、身体感覚の認知がセキュアベース形成に関わっているのではないかとという仮説のもと、図1では、内省が心と身体の双方のネットワークに及ぶのではないかと仮定した。

3. SELの5つの力

社会性と情動の学習(SEL: Social and Emotional Learning)は、欧米で始まっているが、米国では1994年に設立されたCASEL(Collaborative to Advance Social and Emotional Learning)⁽⁴⁾を中心に進められている。CASELではSELを「感情を理解し適切に対処する、前向きな目標を設定し達成する、他人に対して思いやりを示す、他者と良い関係を築き維持する、責任ある意思決定をする一連のプロセスの学習」と定義している。そして、SELの中で育成すべき重要な力として、「自己への気づき(Self-Awareness)」「他者への気づき(Social Awareness)」「自己のコントロール(Self-Control)」「対人関係(Relationship Skills)」「責任ある意思決定(Responsible Decision-Making)」の5つをあげている(表1)。

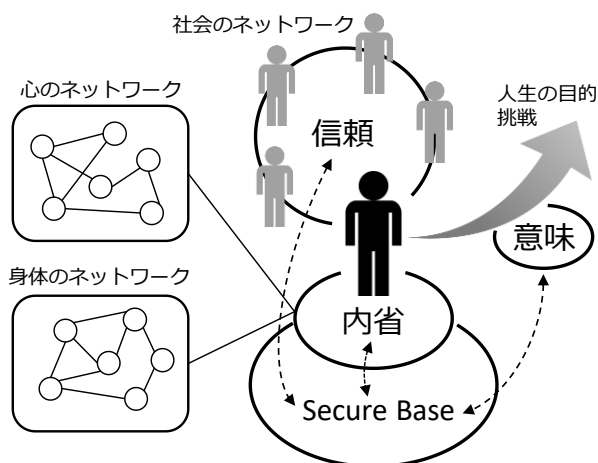


図1 内省、信頼、意味とセキュアベースの関係

表1 SEL で育成すべき5つの力 (CASEL HP より)

| 自己への気づき | 自己のコントロール | 責任ある意思決定 |
|----------|------------|----------|
| 感情の同定 | 衝動制御 | 課題の同定 |
| 自己知覚の精密化 | ストレスマネジメント | 状況の分析 |
| 強みの認識 | 自己規律 | 問題解決 |
| 自己信頼 | 自己動機づけ | 評価 |
| 自己肯定 | 目標設定 | 内省 |
| | 組織化スキル | 倫理的責任 |
| 他者への気づき | 対人関係 | |
| 他者視点の取得 | コミュニケーション | |
| 共感 | 社会的参加 | |
| 多様性の受容 | 関係性構築 | |
| 他者への尊敬 | チームワーク | |

ここであげられている5つの力は、Goleman がいうEQ (情動知能) ⁽⁶⁾の5つの側面 (自己認識, 自己統制, 意欲, 共感, 社会的能力) と重なるところが大きい。

4. 地域の問題解決型 PBL

福井県内の大学間連携の一環として、複数の大学の学生の混成チームで、地域の方からの問題提起を受け、フィールドワークを通して自分達なりに問題定義を行い、問題解決を図り、最後に寸劇で地域の方に解決策を提示しフィードバックを受ける、PBL を2014年度から実施している⁽⁶⁾。

この授業は、週末を使い、5日間の集中講義として実施しているが、授業設計の要は、セキュアベースの3要素のうち「内省」と「信頼」である。内省を促進するために、自ら問いを立てることを重視し、そのためデザイン思考を導入している。また、信頼に関しては、自ら信頼関係を創る体験をするため、立教大学や早稲田大学で実施しているリーダーシップの最小3要素⁽⁷⁾を取り入れている。この取り組みは比較的うまくいっているが、その点を実証するため、2018年度の実施の際、情動知能の質問紙である日本語版 WLEIS⁽⁸⁾を使って1日目(プレ)の5日目(ポスト)の終了時に測定を行った。結果は表1のようであった。

表1 情動知能の測定結果

| N=27 | 自己の情動評価 | 情動の調整 | 他者の情動評価 | 情動の利用 |
|------|------------------|------------------|-----------------|-----------------|
| プレ | 19.0 (5.05) | 16.5 (5.28) | 19.6 (3.63) | 16.8 (4.42) |
| ポスト | 21.7** (4.22) | 18.6** (4.76) | 21.6* (3.43) | 18.1* (4.29) |

括弧の中は標準偏差、**1%有意、*5%有意

日本語版 WLEIS には、5つの下位尺度があり、それぞれ、自己の情動評価、情動の調整、他者の情動評価、情動の利用である。これらは、Goleman がいう情動知能の5つの側面のうち4つに対応している。今回この全ての尺度で向上が見られた。このことは、内省する力を高めること、信頼関係を創ることが、

情動知能の向上に寄与することを示唆している。

5. 考察とまとめ

本稿で言及している「内省」「信頼」「意味」の3つの側面は、もともと、自律的学習者を育成するための3要素として抽出した要素である。この要素を育成することが、SELの重要な5つの力を育むことにつながるのではないかと、という点が、本稿で言いたかったことである。

従来から、この自律的学習者の3要素と、Goleman がいう情動知能の関係は調べており、本稿でも説明したとおり、「内省」「信頼」に焦点をあてたPBLにおいて、情動知能が向上することが示されている。このことは、この3要素が、SELにおいても重要な役割を果たすことを示唆している。

さて、CASEL ではSELを「感情を理解し適切に対処する、前向きな目標を設定し達成する、他人に対して思いやりを示す、他者と良い関係を築き維持する、責任ある意思決定をする一連のプロセスの学習」と定義していることは前述している。このうち、「感情を理解し適切に対処する」という点は「内省」で行っていることと同じである。「他人に対して思いやりを示す、他者と良い関係を築き維持する」という点は、まさに「信頼」である。「前向きな目標を設定し達成する」という点は、「意味」のところである。「責任ある意思決定をする」という点は、この3つのどこかだけに当てはめることはできないが、「内省」「信頼」「意味」が揃って始めてできることではないだろうか。こう見てくると、SELは、自律的学習者育成の方法とも重なっており、「内省」「信頼」「意味」が、SELのキーワードになりうるのではないかと考えている。

参考文献

- (1) 山川修, 「自律的学習者育成のために必要なダイアログの機能は何か」, 第43回教育システム情報学会全国大会予稿集, pp.229-230, 2018.
- (2) 山川修, 「ダイアログに対して内受容感覚の果たす役割とセキュアベース」, 教育システム情報学会第44回全国大会講演論文集, pp.201-202, 2019.
- (3) Bowlby, L., Attachment & Loss: Vol.1. Attachment. New York: Basic Books, (1969).
- (4) <https://casel.org/wp-content/uploads/2019/12/CASEL-Competencies.pdf>
- (5) Goleman, F. "Emotional intelligence: Why it can matter more than IQ?" Bantam Books, New York (1995). (土屋京子訳, EQ: こころの知能指数, 講談社)
- (6) 山川修ら, 「ディーブ・アクティブラーニングのための問いと関係性のデザインと実践 I」, 日本教育工学会研究報告集, JSET 17-1, pp.703-708, 2017.
- (7) 日向野幹也, 松岡洋佑, 「[増補版] 大学教育アントレプレナーシップ ~いかにリーダーシップ教育を導入したか」, BookWay, 2017.
- (8) 豊田弘司ら, 「日本版 WLEIS (Wong and Law Emotional Intelligence Scale) の作成」, 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 20巻, pp.7-12. 2011.